

# やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

前回、前々回と天阪から岩屋峠を越えて当麻寺へ至る道の途中にある傘堂と、初瀬街道沿いの長岳寺への進入路にある五智堂の二つの傘型の建造物を紹介した。

傘堂は藩主の位牌堂として建てられたもので、東面には阿弥陀仏が祀られていた。五智堂には五智如来(天日・阿闍梨・宝生・阿彌陀・不空成就是)が祀られている。建立の時代や経緯は異なるが、ともに道行く人々が雨や暑さを避けて、信仰の場へ辿り着けるように配慮して建てられたのだろうとした。

その宝形の屋根と中央の柱の組み合わせの印象から、これを「傘」と捉えて俗に「傘堂」と呼ばれてきた。

ところで、この傘型の建造物はどのようにして生まれてきたのだろうか。類似の構造物として

は、石造の「笠塔婆」がま

ず思い浮かぶ。その代表的なものとしては、奈良市奈良坂にある般若寺の笠塔婆がある。鎌倉時代弘長元年(1261年)に宋から来日した石工伊行末の子が亡父の菩提と存命の母の後世のために一基ずつ造立したもので、4・5~4・8mほどの仰

うちの旧曹源寺本に

は、施餓鬼

会でにぎわ

う人々の様

子と水を求

めで近寄る

餓鬼の姿が

描かれてい

る。

寺の門前

らしきところ

で仏画や

印仏が売ら

れ、人々が

集まる所に

は、背丈よ

り高くて太

い角柱の上

る。

こうした木製笠塔婆が、永続性を求めて後の石造笠塔婆につながるのだろう。笠は尊い仏菩薩の頭上に差し掛けられた天蓋である。庶民の使用する笠は、江戸時代には笠(がらかさ)、差し笠、笠に柄を取り付けたものとなって一般の人々も次第に用いるようにな



「餓鬼草紙」(京都国立博物館所蔵)、「Co—Basee」収録

## 笠塔婆から傘堂へ

宇陀市室生の小原社堂墓地、談山神社へ向かう道の摩尼輪塔、長岳寺等塔婆など、鎌倉期以降のものが残っている。これらは笠や屋根の下に仏菩薩を彫り込んでおり、傘型

の建造物はこうした笠塔婆の流れを汲んでいると考へられる。さらにこの石造等塔婆の元になるものではないかと指摘されているの

が、平安時代末期の作とされる国宝「餓鬼草紙」に描かれた信仰施設である。この絵巻は餓鬼道に落ちた亡者の有り様を描いている。絵の周りは波状の額板で飾られ下に花も供えられている。

この傘のイメージを託した建物として、傘堂が人々の話題に上ってくるのだろう。笠や傘には、古くから人々の思いがこもっているが、これはまた別の機会に触れてみたい。